

## チェックテスト 解答

### 1章 子どもの発達と作業療法

#### 1 姿勢・運動発達とその背景 (p.6)

①

覚醒水準，重心の高さ，支持基底面の広さ，心理的な緊張

②

頸部の抗重力伸展活動，頸部の立ち直り

③

頸部および体幹の立ち直り反応，パラシュート反応

④

座位での抗重力的な活動，立ち直りの際の骨盤の分離運動，パラシュート反応，空間での頸部，体幹の立ち直り反応

⑤

立ち直り反応による姿勢の安定性，新しい支持基底面をつくり，新たな支持基底面の中に重心移動をすること，それを連続で行うこと。

⑥

立位での立ち直り反応と平衡反応，ステッピング，ホッピングなどの平衡反応，支持基底面の連続的变化

⑦

把握については，手掌把握反射が優位だが，生後4カ月ごろになると尺側手掌把握がみられ，物を握った際には手関節は屈曲位をとる。生後6カ月ごろになると橈側手掌把握がみられ，生後8カ月ごろになると橈側手指把握がみられる。つまみについては，生後8カ月ごろになると側腹つまみがみられ，生後10カ月ごろからは指腹つまみ，1歳ごろには指尖つまみがみられる。

⑧

上肢が使えるようになるため，微細運動が発達

しつまみの動作もより精細になる。両手の協調，手と口の協調，物の操作が発達し，遊び，セルフケアなどの活動の幅が広がる。

⑨

捕食とは食物を口唇を使って口腔内に取り込むこと。単に食品を取り込むだけでなく，捕食することで舌尖と横口蓋ヒダの間に食品を取り込むことができる。生後6カ月ごろに獲得する。

⑩

舌尖と横口蓋ヒダの間に食物が入り，そこで舌尖を使って押しつぶすこと。生後7～8カ月に獲得される。

#### 2 感覚統合機能の発達 (p.20)

①

前庭感覚，固有受容感覚，触覚

②

眼球運動，姿勢，バランス，筋緊張などのコントロールと，重力への安心感，触覚：哺乳，食べること，母と子の絆

③

前庭感覚，固有受容感覚，触覚

④

身体知覚，身体両側協調性，運動企画，活動レベル，注意の持続，情緒の安定性

⑤

前庭感覚，固有受容感覚，触覚，視覚，聴覚

⑥

言語，話す能力や目と手の協調性，視知覚，目的活動

⑦

前庭感覚，固有受容感覚，触覚，視覚，聴覚

⑧

集中力，組織力，自尊心，自己抑制，自信，  
教科学習能力，抽象的思考や推理力，大脳半  
球および身体両側の特殊化

⑨

小学校入学のころ：おおむね6歳ころ

### 3 認知・思考機能の発達 (p.23)

①

感覚器官の発達とともに考える。

②

心理社会的危機

③

発達の順序性

④

発達課題は「自主性」(活動に自分で取り組み，  
経験とともに徐々に適切にできるようになる  
ことを身につける段階の時期)である。

⑤

無生物(命のないもの)や植物などを，生きて  
いるもののように考えること。例えば，「お人  
形が『寒い』と言っているから，ベッドに寝か  
せたの」や「車がお腹空いたって言っているか  
ら，早くご飯にしなくちゃ」など。

### 4 コミュニケーション機能の発達 (p.26)

①

生後3カ月くらいまでにみられる。子どもが快  
適あるいは機嫌のいい状態にあるときに出る，  
泣き声ではない「あう〜」や「くう〜」などと  
いう喉の奥からの発声であり，主に母音中心で  
ある。

②

基準的喃語

③

指差し行動 (Pointing)

④

有意味語の発現はおよそ1歳前後である。

⑤

ママキタ，パパコッチ，ワンワンイタ，ブーブ  
バイバイなど

### 5 子どもの発達と遊び (p.32)

①

喜び，楽しみ，おもしろさを求める活動，自  
由で自発的な活動，その活動自体が目的であ  
る非実用的な活動，日常の現実経験に根ざし  
ながら，日常性を離脱した活動である。ま  
た，心から楽しいことで，他から強要されな  
い。

②

他者と共感すること，賞賛を得ることなどは，  
遊びの楽しさを広げることになる。基本的信頼  
関係や他者との関わり方も人との関わりの中  
で形成していくため。

③

感覚運動機能の向上，体幹中枢部の安定性の促  
通，視機能の発達，アクティブタッチの機会，  
ボディイメージの形成

④

巧緻性の向上，構成的な遊びの準備，セルフケ  
アの準備

### 6 セルフケアの発達と遊び (p.35)

①

セルフケア遂行に必要な機能は，遊びを構成  
する要素との共通点が多い。そのため，遊び  
を通してセルフケアに必要な要素を獲得し，  
セルフケアに汎化していく。

②

自食には口腔機能が十分発達していること  
(捕食，押しつぶしや咀嚼，食塊形成，成人

嚥下が獲得されていること) および, 上肢機能 (口裂中央部に食品を運ぶこと, 次々入れないこと) の両方が発達し, 協調性が得られることが不可欠である。

③

- ・衣服の空間と自分の体の方向を一致させること
- ・衣服の空間に合わせて自分の体を操作すること
- ・視覚情報ではなく, 衣服や身体運動に伴う感覚を利用する必要があること
- ・更衣動作には手順の理解が必要なこと
- ・衣服の操作および身体の操作のために姿勢運動コントロールが不可欠であること

④

排泄のコントロール, 陰部の清拭, 更衣に加え, トイレへの移動や便器への移乗も必要となる。

## 7 作業の見方 (p.46)

①

作業は時間, 空間, 社会的な状況で起こる主観的な出来事であり, 個人に起こる固有の経験である。活動は, 客観的であり, 個人の従事や文脈とは関係のない行為の形態である。

②

作業科学は, 作業や作業的存在を探求する学問であり, 人が行なう日々の活動に関する知識を生み出し体系化することを目的としている。

③

作業的存在を理解するための作業の見方には作業の基礎構造, 形態, 機能, 意味がある。

④

作業の発達, は, 生物医学的および心理学的発達, および人間と人間以外の環境との継続的な相互作用の結果として, 生涯にわたって生じる作業従事, 作業遂行, および作業的アイデンティ

ティのゆるやかな変化である。

⑤

機会, モチベーション, 資源, 親の視点と価値

⑥

家族, 友人, 仲間との交流, 経済的発展, 生活用品の開発, 社会的, 歴史的な出来事, 個人的な出来事など